

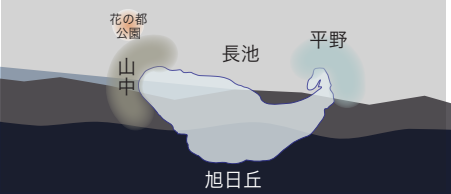
やまなかこ村のコリほぐし

■概要

山中湖村は、時代とともにその生業の形を変え適応してきた村であり、現在では観光業を主として成り立っている。近年の観光客はいわゆる商業としての観光よりも、その土地の生活や文化に直接触れられるような観光の形態を求めており、今まで暮らしと観光を切り離してきた山中湖村はまたしても変化を迫られている。また、村の振興を維持するためには住民の自発的な取り組みが不可欠である。私たちは、二つの戦略を立て問題の解決を図った。ひとつは観光地として特徴的な山中・平野各地区それぞれがもつ歴史を調査しその住民の意識を探ること。もうひとつはそこから得られた住民意識からわかる、障壁の解消に有効な解決のカギを各地区に見出し、それぞれに適切な施策を講じることである。これら二つの戦略により、持続的な村の振興を図る。

■地区概要

山中湖村は、山中・平野・長池・旭ヶ丘の4地区から成る。特に山中・平野は住民により観光地化が進んだ地区で、山中湖村を特徴づけている。

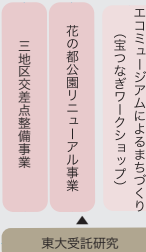


問題点とその背景

背景

富士山の世界遺産登録を一つのきっかけとして、山中湖村は、近年停滞気味の観光業の振興に乗り出し、村の魅力を上げる取り組みを始めた。

現在は、右の3つの事業に代表されるさまざまなプロジェクトが進行中である。東大は、受託研究という形でプロジェクトに関わっている。



問題点

現在は村が主導して観光業振興を進めているが、住民が村や他機関に任せきりである限り応急処置的な対応は出来ても、今後新しい問題が発生したときに自分たちで解決できない構造ができあがってしまう。

住民が自立して取り組まない限り、一過性の効果しか生まれない

村の振興を維持するためには、住民の自立を促進する必要がある。

解決のための戦略1：各地区の特徴とその要因の調査

調査方法

- 文献調査
村史、行政資料、地図資料等
- 現地視察
- インタビュー調査
住民の方計35名から、人々の暮らしに関する情報を伺った
- アンケート調査
湖の利用等について、長池地区16名、山中地区9名の方に協力いただいた



生業の歴史

●農村生活

もとは農村であったが生産性が悪く、**個々人で馬を所有**して旧鎌倉往還沿いで駄賃稼ぎが盛んに行われた。



●米軍相手の産業の発展

終戦直後、北富士演習場への米軍駐屯に伴い、鎌倉往還側は米軍を相手にしたビアホール等が立ち並び歓楽街として発展し、山中地区にかつてない潤いをもたらした。



●企業の保養所の増加

米軍撤退後、歓楽街の産業は廃れ、旭日丘地区二做って保養所が建った。すると後を追うように次々と保養所経営が広がった。

●観光地としての発展

保養所の拡大で観光客が増加すると、バブルが崩壊すると、保養所の契約しポート業や飲食店などの個人経営が打ち切られていった。同時に営の店が競うように立ち並び、観光地化が進んだ。

●保養所の減少

保養所の拡大で観光客が増加すると、バブルが崩壊すると、保養所の契約しポート業や飲食店などの個人経営が打ち切られていった。同時に営の店が競うように立ち並び、観光地化が進んだ。

生業の変遷が各地区の生活や集落構造を特徴付けている

観光地化以前

江戸・明治

●農村生活

山中に比べて土壌に恵まれた平野地区では養蚕や畑作が行われる中で、**共同して**土地を利用する文化が根付いた。

観光地化初期

大正～昭和初期



●スケート民宿としての発展と衰退

大正末期から平野地区の湖上ではスケートが盛んに行われ、湖畔に面した農家はスケート客の宿泊施設に姿を変えた。昭和30年代、富士急行による富士吉田のスケートセンター開設とともに山中湖のスケートブームは終わりを告げた。

観光地化後期

戦後



●テニス民宿としての発展

テニスブームに合わせて、平野ではテニス民宿が内陸進出していった。畑や水田はテニスコートに転用され、生業の中心が観光業に移行した。

現在

バブル崩壊以降

●複合スポーツ民宿への転換

テニスブームが去ると、テニス民宿はグラウンドを持つ複合スポーツ民宿へ転換していったが、他の合宿地との競合もあり、以前のように人々を集めるのは難しくなっている。

各地区の特徴

山中

地域の持つ魅力

●私的な生活道「たて道」



旧鎌倉往還と国道138号を結ぶ何本ものたて道は、かつては洗濯や障子の張替えをしに湖にでるときに抜け道として利用され、公道でありながら住民にとっては自分の庭のような存在である。

●住民挙げての伝統行事「安産祭り」



安産祭りは諏訪神社を拠点に毎年開催される。祭りの日には多くの家で料理を用意し、近隣の人々を呼び込んででもてなしたり神輿の担ぎ手に振舞ったりする。

表出している問題

●生活感薄商業空間としての湖畔



湖畔沿いは観光商売の場として成長してきたため、観光施設の看板や貸しポートの機橋、駐車場が立ち並び、雑多な印象を与える。

生業の変遷から生み出された特徴

●旧道から湖畔沿いへと進出した生業

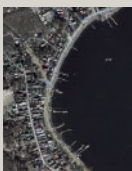
この地域では古くは**旧鎌倉往還**沿いに、この道での駄賃稼ぎを生業とする集落が広がっていた。国道138号が通り、観光地化が進むとともに、湖畔沿いに商業空間が広がった。

●「オモテ」=観光、「ウラ」=生活の意識

湖畔沿いに商業空間が進出し、山中地区は観光地として「**オモテ**」にむけられた湖畔沿いと、生活の場として外見からは「**ウラ**」に置かれた**旧鎌倉往還**沿いに分かれた様相をしている。

●個人色の強い職業形態

農作業に向かない土壌ゆえに駄賃稼ぎが生業の中心だったこの地区では、共同で何かに取り組む意識は薄く、**個人**が別々に生業を営んできた。このことは機橋の乱立等、分割された湖畔の使われ方にも表れている。



●湖畔に背を向けた暮らし

湖畔に親しみスケート民宿の地として発展した平野であったが、スケートからテニスに流行が移りテニス民宿の内陸進出が進むと、**住民の暮らしは湖畔に背を向けたものとなった**。

●生業所以のつながり「結い」の文化

生業を変える中でも農村期の畑作や養蚕で共有地を利用してきた平野地区住民の共同体意識は受け継がれた。これは今なお「**結い**」の文化として残っており、農協が形を変えてきた**民宿組合**の結束は強い。

●血縁による「組」と新住民との距離

他の地区と異なり組が**血縁関係**で構成されているため、新しくこの地区に移り住んだ人は組に入れない場合も多い。**ペンション経営者**と**民宿組合**との交流のなにも代表される新旧住民の距離はまちづくりをする上で一つの障壁となる。

平野

地域の持つ魅力

●湖と富士山を同方向に臨む立地



富士山の山頂に太陽が重なる「ダイヤモンド富士」が見られる貴重な場所でもあり、多くのカメラマンが訪れる。

●地元の収穫祭「おひまち」



御日待ち（おひまち）とは、春と秋に行う組ごとの集まりである。特に秋に行われる御日待ちは収穫祭としての意味もあり、毎年当番の人の家で収穫物を分け合って食べる。

表出している問題

●無計画な開発と空地・廃屋の増加



テニス民宿ブームによってテニスコートの開発が内陸地にむけて急速に進んだ。しかし現在は使われなくなったコートや畑、家屋が点在する。

山中地区の特徴：個としての意識が強い

提案にあたって

まちづくりに住民が自立して取り組むようにするときに、これらの特徴がもたらす**障壁**があることが分かった。

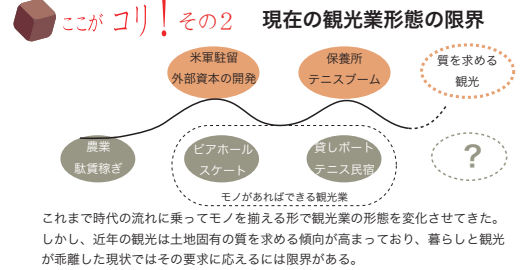
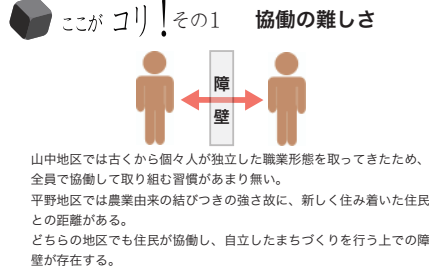
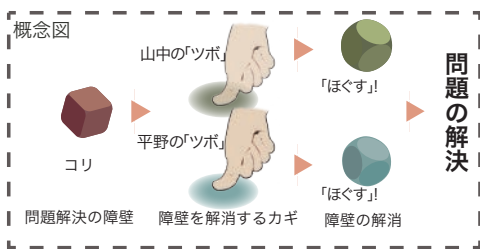
同時に、住民の暮らしと観光が乖離している現在の山中湖村では現行プロジェクトで期待されている魅力の上昇にも**限界**があることが分かってきた。

これらの**障壁**や**限界**はいわば「**コリ**」のようなものであると考え、その解決のカギとなる「**ツボ**」を押すことで村の振興の維持を実現する。

同じ「**コリ**」に対しても、地区ごとの特徴の違いを読み込み、それぞれに適切な違った「**ツボ**」を押すことが求められる。

平野地区の特徴：生業由来の繋がりが強い

解決のための戦略2：問題解決の際の障壁に対し、それぞれの地区の異なる特徴に合わせた提案をする。



山中の家

住民の協働意識が育つ下地をつくる

特徴①：住民主体の運営

初めの運営は古民家運営委員会が中心となり行うが、住民の活動の拠点として親しまれる場所となるに従い、最終的には完全に住民による運営に移行させ、運営費も利用者の創意工夫で賄われるようにする。これが住民が協働し、共に観光を考えるきっかけとなる。

特徴②：良い交流を誘導する

例えば「17:00~20:00はスーツを着ない」など、既存のコミュニティのあり方にとらわれのない交流のあり方を誘導するルールを置くことで、ホッペで話しかける特別な場となる。そしてそれがやがて、自由な発想で山中地区のこれからのことを考える基礎となる。

ツボの理由①：空き家の有効活用

古い日本家屋がもつ、縁側などの魅力の利用により様々な人に開いた魅力的な場所となる。また、湖畔側の景観的な魅力を向上させる効果もある。

ツボの理由②：目につきやすい位置

観光客の目につきやすい場所にあり、人を惹き付けて、たて道まで誘導する拠点となる。整備計画のある交差点から歩くのに適切な距離でもある。

最近の子ども達はどんな事で遊んでいるのかなあ。

今度からは、新しく出来た山中の家で暮らそう。

子ども達が暮らに興味を持ったみたい。今度教えてあげよう。

これからは私たちでこの家を守らないといけない。皆で知恵を絞って頑張ろう。

協働意識のきっかけ(運営主体移行)

住民の集まりがバラバラ 様々な人々を交流させる 新たなつながりが生まれる

協働意識が広く根付く

ゆっくりと時間をかけて少しずつコリが解消してゆく。

市民農園

住民の協働意識を育てる農園

特徴②：花の都公園との連携 / 空地の有効利用

現在、花の都公園では作物の苗を無料で山中湖村の各地区に配布する試みが検討されているため、その苗を利用する。経営の仕組みは上図のようになる。また平野地区には使われなくなったテニスコートや廃屋が多く点在しており、それらの有効活用にもつながる。

特徴①「おひまち」に巻き込む

昔からの住民と新しい住民が「おひまち」という行事によってさらに絆を深める。また、観光客に振る舞うことで、にぎわいがあふれる。

ツボの理由①：農作業で共同意識を育む

平野地区の昔からの住民は、共同意識を重んじている。一緒に農作業をすることで、新しい住民との間にも共同意識を育てられる。

特徴②：湖畔の整備をせうして 人の居場所が出来る。

現在は湖畔近くにポートが数多く置いてあり、景色を楽しむ人の居場所となる空間はない。借景民泊の整備を通して、湖畔に並んだポート等がカーソルに整理され、人のための居場所が自発的に創出される。

特徴②：住民の意識を育む

借景民泊整備によって景色に配慮する気持ちや、見える場所をキレイにしようとする気持ちが生まれ、活動にもつながってゆく。

概念図

協働 ー 民間組合 結いの文化

昔からの住民 ー 新しい住民

イベント

協働意識

昔からの住民 ー 新しい住民

一緒に取り組み易い活動で壁を取り払う

両者をいきなり会議の場で結ぶのではなく、共同のイベントにより交流を図ることで、心理的障壁が取り除かれて少しずつ協働意識が育まれる。

たて道

オモテとウラを繋ぎ交わせ土地の魅力を上げる

ツボの理由①：私と公の混ざった場

たて道は元々、住民が湖畔に出る為の抜け道として引いた私的な道である。そこを観光客も通る道にすることで、オモテとウラの交わる魅力的な場所になる。

ツボの理由②：歩くのにちょうどいい距離

山中地区で湖畔沿いを歩ける範囲は限られており、それが村の整備計画のある交差点付近からこのたて道の付近までである。歩くにも適切な距離のため、回遊性が高まり他のたて道もこれに倣って整備しようという機運が高まると考えられる。

ツボの理由③：住民参加を誘発する

既存の隣保組の結束力を利用して、たて道の整備の際から住民の参加を実現できる。

特徴①：オモテとウラをつなげる動線

魅力的なたて道で二つの道をつなぐ事で、住民の行動がオモテに広がり、観光客の行動範囲もウラまで広がる。

特徴②：とどまれる魅力的な空間

オモテとウラを繋ぐ動線としての役割だけでなく、そこに留まっていたいと思えるような魅力的な空間として、たて道を整備する。細くて長いたて道の持つ奥まった雰囲気を感じる魅力的な空間となる。

たて道フードコート

村の飲食店のメニューを常備しており、古民家を出前注文が可能。たて道で食べることが出来る。

最近のたて道は湖側になったから行って うちのたて道も綺麗にしようじゃないか。 このあたりは賑わっていいね。 みた。いい所だったよ。

概念図

旧道 湖側道路

現状 提案 未来

生活と観光の場の分離 生活と観光の場をつなぐ 周りへの波及効果 面的な魅力の広がり

鎌倉往還側が生活の場、湖畔道路側が観光の場となって交わり合うことなく存在している。 かつて住民の生活と湖畔を結んだ たて道を利用する。 山中地区の観光発展の背景にあった。 個々の家が他の家の成功例を見習って 次々と出店するという競争意識を利用。 個々の働きかけを利用して、 結果的に地区一帯の魅力が向上する。

借景民泊

湖が持つ魅力に実を向ける

ツボの理由：湖畔の景観を活かす

湖と富士山を一望できる湖畔景観は平野の魅力の一つと言えるが、今は生業・集落構造ともに湖畔から遠くなっている。借景民泊を整備した民泊に村から補助金を出す制度により、平野の潜在的魅力を引き出すきっかけとなる。

特徴①：湖畔の整備をせうして 人の居場所が出来る。

現在は湖畔近くにポートが数多く置いてあり、景色を楽しむ人の居場所となる空間はない。借景民泊の整備を通して、湖畔に並んだポート等がカーソルに整理され、人のための居場所が自発的に創出される。

特徴②：住民の意識を育む

借景民泊整備によって景色に配慮する気持ちや、見える場所をキレイにしようとする気持ちが生まれ、活動にもつながってゆく。

概念図

潜在的な魅力に目が向いていない

借景民泊という生業の性質上、本来魅力を持つている場所に目が向いていない状態である。

土地の魅力に気づく

湖畔景観のような魅力に気づかせることで、 住民は埋もれていた土地の魅力を再認識し、それをどうやって上げるか考えるようになる。

社会的効果

住民の協働が実現 ▶ 自立したまちづくりの確立

村の観光地としての在り方が現在求められているものに近づく ▶ 村の魅力が上昇

観光地として村に活気が戻り、さらに 新たな問題にも住民主体で対処できる村に